

(大口市青木字瀬ノ上)

位置と環境

遺跡は大口市役所より東へ2.5km離れた標高180mの市山川右岸に南面する河岸段丘先端部に位置する。東方200mには地下式板石積石室墓が140基発見された平田遺跡が所在する。

調査の経緯

昭和11年、田圃の盤下げ中、地下式横穴墓・地下式板石積石室墓各1基が発見され、寺師見國が調査を行っている。県営圃場整備事業に伴って昭和60年に大口市教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て発掘調査が実施された。遺跡面積は2,000㎡である。

遺構と遺物

縄文時代前期・古墳時代の遺構・遺物が発見された。縄文土器は甌や曾畑式土器の影響をもつ土器であり、7類に分類される。

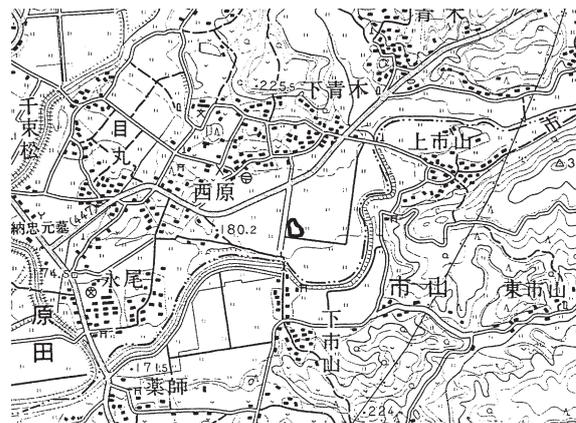
石器は、石槍・石錐・石匙・石鏃・スクレイパーが出土している。

古墳時代の遺構では、地下式横穴墓10基、地下式板石積石室墓2基が検出され、昭和11年に各1基が検出されているので、地下式横穴墓11基、地下式板石積石室墓3基になった。

地下式横穴墓の形態は、いずれも両袖平入りタイプで、玄室平面形は長方形もしくは楕円形プランである。玄室規模は最大大きい10号が2.5㎡、最小の6号が0.9㎡、それ以外は1.5～2㎡である。天井形態は寄棟を呈する7号以外にも天井が陥没している詳細は不明であるが家形を呈していたと思われるものもある。羨道は幅・奥行きともに短く平入りにつき、堅穴上面は板石や円礫を用い閉塞されていたと思われる。

副葬品は、鉄刀・鉄剣・鉄鏃等武器が主体である。特殊な鉄製品として、2号から中程が剣形で刀身の基部と鋒が刀形を呈するものや、5号・8号に蛇行剣が各一振りずつ出土した。

出土鉄鏃は圭頭鏃や長頸鏃、腸袂三角形鏃がありいずれも5世紀後半～6世紀初頭の時期のものであり、この遺跡の地下式横穴墓は、この時期に築造されたと推定される。以前、7号の堅壙床面から出土した土師器碗は調査報告書で8世紀に比定していたが、その後7世紀のものと考えられるようになった。



第1図 瀬ノ上遺跡の位置

この壙は堅壙の閉塞に使われた板石が床面に落ちていることなどから、後世の紛れ込みの可能性が高い。

瀬ノ上遺跡から発見された地下式横穴墓の中で最も精美な玄室と寄棟天井をもつ7号は、そのほかの地下式横穴墓より若干古くなる可能性がある。

特徴

地下式横穴墓と地下式板石積石室墓は分布を異にし、盛行した時代も異なるといわれている。この相異なる両墓制の併存は、両墓制をもつ集団の勢力圏の伸長や時代差、あるいは古代の社会的背景を考察するうえで貴重な遺跡である。

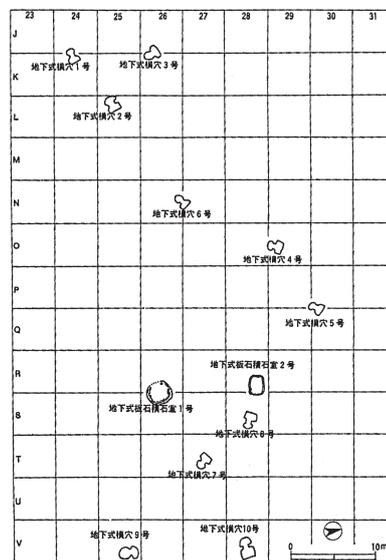
資料の所在

出土遺物は、大口市教育委員会に保管されている。

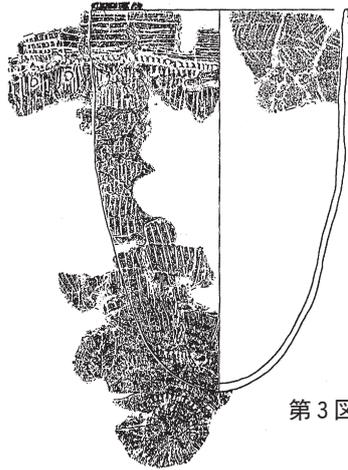
参考文献

大口市教育委員会1986「瀬ノ上遺跡・平田遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』5

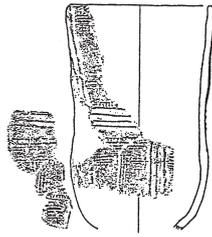
(牛ノ濱修)



第2図 地下式横穴墓・地下式板石積石室墓位置図

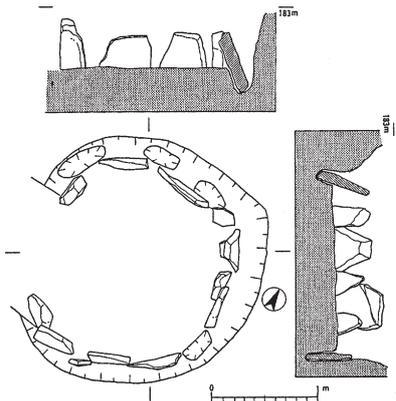


V類土器

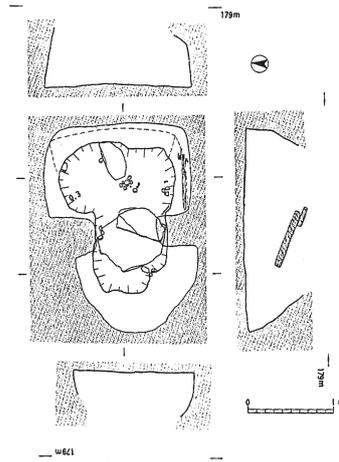


I類土器

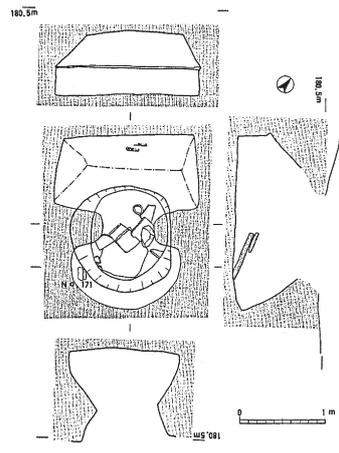
第3図 出土縄文土器



地下式板石積石室墓1号

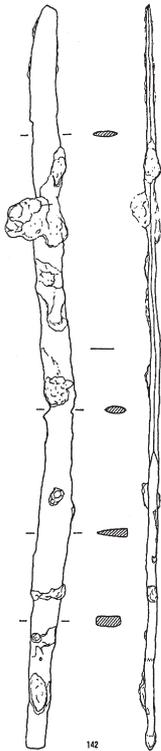


地下式横穴墓1号

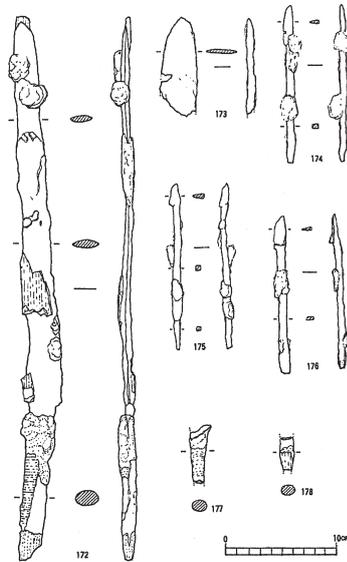


地下式横穴墓7号

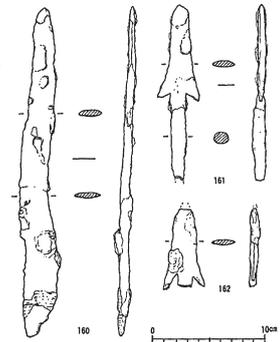
第4図 検出遺構



地下式横穴墓2号副葬品



地下式横穴墓8号副葬品



地下式横穴墓5号副葬品



地下式横穴墓7号出土高台付埴

第5図 出土副葬品